



# 史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 中ノ御門発掘調査報告書

平成11年3月

鳥取市教育委員会

## はじめに

この発掘調査報告書は、史跡鳥取城跡附太閤ケ平保存修理事業の一環として実施した鳥取城跡中ノ御門の発掘調査の記録です。

鳥取城跡は、市民の郷土を愛する心の象徴であり、後世に永く継承していくべき貴重な歴史遺産です。鳥取市では、このような認識のもとに、関係各機関のご指導をいただき、また、市民各位の深いご理解をいただきながら保存整備に努めているところです。

今年度実施した中ノ御門の発掘調査も、文化庁、鳥取県教育委員会等の関係各位のご助力によって無事所期の目的をはたし、報告書刊行のはこびとなりました。ささやかな冊子ではありますが、各位のご利用に供していただくとともに、鳥取城跡理解の一助となれば望外の喜びです。

平成11年3月

鳥取市教育委員会

教育長 米澤秀介

<10>0100570340

## 例　　言

1. 本書は、史跡鳥取城跡附太閤ケ平保存修理事業として平成10年(1998)度に実施した鳥取城跡中ノ御門の発掘調査報告書である。
2. 本報告書の編集は、鳥取市埋蔵文化財調査センターの協力を得て教育委員会文化課が担当した。
3. 本書に用いた方位は磁北を示し、レベルは海拔標高である。
4. 発掘調査によって作成した記録類及び出土遺物は、鳥取市教育委員会で保管している。

# 目 次

はじめに

例 言

目 次

## I 烏取城の位置と歴史的環境

1 立 地 .....	1
2 烏取城の成立 .....	1
3 秀吉の烏取城攻略 .....	1
4 近世の烏取城 .....	3
5 烏取城の城郭構成 .....	3
6 明治維新後の烏取城と史跡指定 .....	4

## II 発掘調査の経過と体制

1 調査の経過 .....	9
2 調査体制 .....	9

## III 発掘調査

1 中ノ御門 .....	10
2 調査の結果 .....	15
(1) 調査地層序 .....	15
(2) 石垣 .....	15
(3) 石段 .....	19
(4) 碓石 .....	19
(5) 出土遺物 .....	20

## IV まとめ .....

写 真 図 版

報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	2
第2図	鳥取城跡山上の丸・山下の丸位置図	5・6
第3図	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平史跡指定範囲図	7・8
第4図	因幡国鳥取城絵図（文化4年 鳥取県立博物館蔵）	10
第5図	調査位置図	11
第6図	遺構配置図	12
第7図	調査地断面図	13・14
第8図	第1トレンチ実測図	16
第9図	第4トレンチ実測図	16
第10図	第2トレンチ実測図	17
第11図	北石垣北面根石実測図	18
第12図	第7トレンチ実測図	18
第13図	石段実測図	19
第14図	出土遺物実測図(1)	20
第15図	出土遺物実測図(2)	21
第16図	鳥取御城内手配之図（鳥取県立博物館蔵）	23

## 図 版 目 次

図版1	中ノ御門（明治初年撮影 右 中ノ御門渡槽 手前 宝珠橋 奥 太鼓御門渡槽） 中ノ御門（南西から）	
図版2	中ノ御門（北東から） 南石垣南面（南西から） 北石垣南面（南西から）	
図版3	北石垣北面（北から） 北石垣北面（北西から） 北石垣北面（北西から）	
図版4	北石垣北面中央（北西から） 北石垣北面根石検出状況（北西から） 北石垣東面（北東から）	
図版5	北石垣東面角石（東から） 北石垣東面根石検出状況（北東から） 北石垣南面（南東から）	
図版6	北石垣南面根石検出状況（南東から） 南石垣東面（北東から） 南石垣東面根石検出状況（北東から）	
図版7	南石垣東面下礎石検出状況（南西から） 東石垣西面遺存状況（南西から） 東石垣東面遺存状況（北東から）	
図版8	東石垣西面遺存状況（南西から） 東石垣西面栗石遺存状況（南東から） 石段検出状況（北東から）	
図版9	石段検出状況（北東から） 石段検出状況（北西から） 北石垣北面埋土状況（北東から）	
図版10	石垣1検出状況（北東から） 石垣1検出状況（北東から） 石垣1埋土状況（北西から）	
図版11	出土遺物	

# I 烏取城の位置と歴史的環境

## 1 立地

鳥取市は鳥取県の東部に位置し、鳥取平野の沖積地に拓かれた人口14万人余りの都市である。江戸時代には因幡・伯耆の二国を治めた鳥取池田藩32万石の城下町であり、現在は、鳥取県の県庁所在地として、政治、経済、文化の中心となっている。

鳥取市の立地する鳥取平野は、中国山地に水源を持つ千代川及びその支流によって形成された沖積平野で、平野の東側は上として千代川本流及び支流の袋川によって形成されたものである。鳥取城は、この鳥取平野の東北側に位置する標高263mの久松山に築城されている。久松山の山頂（天守）からは、鳥取平野の大半を見渡すことができるだけでなく、日本海や砂丘、遠く大山までも望むことができる。

久松山の前面は、かつて袋川が蛇行して流れ、低湿地を形成していたといわれる。鳥取の城下町は、この袋川を外堀として利用しながら整備されてきたものである。このため、江戸時代には千代川の氾濫による洪水にたびたび襲われている。

久松山から北西には、雁金山へと尾根が続き、東は羽柴秀吉の鳥取城攻めの際に本陣を置いた本陣山（太閤ヶ平）へと続いている。久松山の背後は円護寺谷に向けて急角度の斜面となって落ち込んでいる。

鳥取城から日本海に面した賀露の港までは袋川、千代川と下って約10キロメートルである。

## 2 鳥取城の成立

鳥取城の築城については、従来、『因幡民談記』の記述から天文14年（1545）布施天神山城の出城として山名誠通によって築かれたとされてきた。しかし、近年の研究では、当時布施天神山城と対立する但馬山名氏によって天文12年（1543）には久松山になんらかの戦略拠点が設けられていたとし、これが後の鳥取城の起源となるものであるという説が出されている。いずれにしても、鳥取平野の東北に位置する久松山に城が築かれたのは、16世紀中頃（天文年間）ということになる。今後、築城時期、築城主について更に研究が進むことを期待したい。

築城当時の因幡の政治状況をみると、因幡の守護は、鳥取平野の西方に位置する湖山池東岸の布施天神山城を本拠とする山名氏であった。この因幡山名氏は惣領家但馬山名氏の同族である。しかし、因幡・但馬の両山名氏は、因幡における支配権力をめぐって鋭く対立していた。この対立の中には出雲月山富田城を本拠とする尼子氏の勢力拡大による因幡地方への影響力も大きく絡み合っていた。天文10年（1541）岩井表の合戦をはじめとして、以後両山名氏の対立抗争は続いたが、この争いの過程でその戦略的要衝である千代川右岸の久松山に砦としての城が築かれた。この城については「山の形嶮岨にして、八葉の谷尾をわけ四方ははしく切り立ちたる事、宛も工匠けづり成せるに異ならず。一略一その高さ万仞にして、周りは二、三里に及べり。あたりに双びの山もなく、尺に千里の地をじじめ一国の山川唯眼の下に明らかなり。」

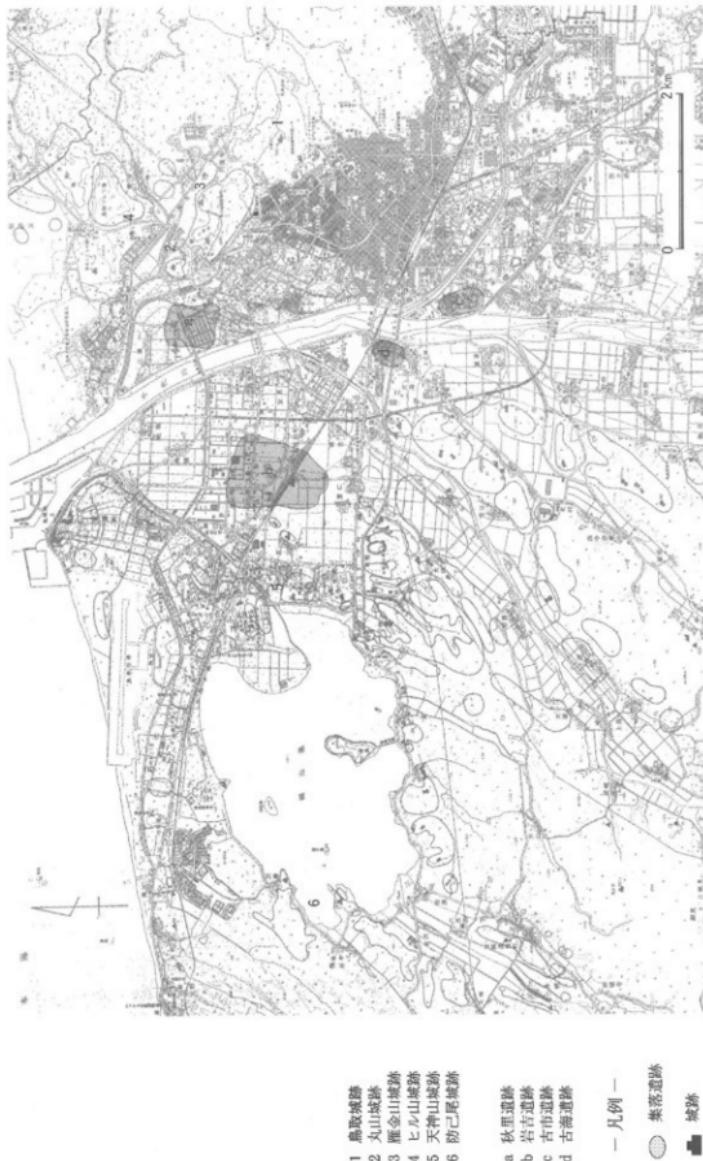
（『因幡民談記』）とあるように、戦略的拠点として良好な立地条件を備えた場所であった。こうして鳥取城は誕生したわけであるが、当初はあくまで布施天神山城の出城であった。ところがこの出城を守る武田高信が天神山に対して反旗をひるがえしたことによって、鳥取城をめぐる攻防戦が永禄6年（1563）からおよそ10年間続くことになる。この戦いによって鳥取城の因幡における戦略的・政治的拠点としての重要性が認識されることになった。

天正元年（1573）因幡の守護山名豊国は武田高信を鳥取城から退けて、かわって鳥取城に入り、これを因幡の本城とするにいたった。

## 3 秀吉の鳥取城攻略

天正4年（1576）織田信長と中国の雄毛利氏が対立し羽柴秀吉による中国攻略が始まった。秀吉は播磨の三木城を降し、但馬の山名氏を平定すると、天正8年（1580）因幡に進攻してきた。これに対し鳥取城の山名豊国はあまり抵抗せずに降伏した。この豊国の降服に対し、不満を持つ国人層は、豊国を鳥取城か

第1圖 周邊遺跡分布図



ら追放し、代わって毛利氏から吉川経家を迎えて、秀吉に対抗する道を選んだ。天正9年（1581）、秀吉は再度因幡に入り、反織田勢力の結集する鳥取城を厳重に包囲した。鳥取城の兵糧を完全に断ち切って攻める戦法である。籠城4ヶ月、城兵は絶望的な飢餓状態のもとで防戦したが、経家の自決をもって鳥取城は陥落した。後にいう鳥取城の「渴え殺し」である。

#### 4 近世の鳥取城

天正9年（1581）秀吉による因幡平定によって、鳥取城には秀吉の部将宮部継潤を置き、因幡の4郡（邑美・法美・高草・八上）4万3千石を与えて支配させた。しかし、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いで西軍に与したため鳥取城主の宮部氏は滅亡した。

宮部氏に代わって鳥取城に入ったのは池田長吉で、池田信輝の三男輝政の弟である。長吉は、城内、城下の大改修を行い、山上ノ丸の天守を三層から二層に改築し、山下ノ丸の二ノ丸、天球丸を築き、更には三ノ丸や堀の拡張整備などを行っている。ここに近世鳥取城のおおよその姿を作り上げた。

豊臣氏が大阪城で滅亡した後の元和3年（1617）には、姫路城主池田光政が因幡・伯耆両国32万石の鳥取城主として転封されてきた。同時に、鳥取城主であった池田長吉の子長幸は備中松山に転封されている。光政の入国によって、これまで小大名によって分割統治されていた因伯両国は一つに統治され、幕藩体制による鳥取藩が誕生した。

寛永9年（1632）岡山藩主池田光仲は当時幼少であったが、鳥取藩との交替転封の命を受けて光政と入れ替わった。以後、鳥取城に入った光仲の子孫が明治維新まで鳥取藩主としてその地位についたので、この系統を鳥取池田家といい、光仲はその祖となった。

#### 5 鳥取城の城郭構成

久松山に構築された鳥取城は、藩政期に描かれた数多くの鳥取城絵図によって、その城構えの様子と拡充の変化はおおよそ判断することはできる。この鳥取城の基本的姿はさきに述べたとおり、池田長吉の時代までに完成しており、これを大別すると山上ノ丸（本丸）、山下ノ丸、その他の諸郭に分けられる。

**山上ノ丸** 山上ノ丸は久松山の山頂を大きく切り拓き、その周囲を高石垣で囲って曲輪としたものである。一段高い本丸の西北隅に更に高く石積をして天守櫓を設けている。天守は初め三層であったとされるが、長吉のとき二層に改めたとされる。この天守櫓はその後元禄5年に消失してしまい再建されることはない。本丸には、その他車井戸、著見櫓、多聞櫓とそれをつなぐ走櫓が設けられており、これらの建物はその後幕末まで残った。山上ノ丸にはその他本丸の東側に二ノ丸、三ノ丸と呼ばれる曲輪があり、西側にも一段低い場所に高石垣で築かれた出丸が設けられている。この出丸から西の尾根を下ると、鐘ヶ平、太鼓ヶ平、松ノ丸などの曲輪の遺構が残っており、長吉の鳥取城大改築以前はこの西尾根が鳥取城の主要な城郭と考えられている。山上ノ丸はこの時期において名実ともに本丸の役割を果たしていたといえるだろう。

**山下ノ丸** 山下ノ丸は、近世における藩政の中心で鳥取城の中核となっていた。曲輪は、二ノ丸、三ノ丸、天球丸、その他の諸郭からなり、堀によって城下と区分されている。これらの曲輪の主なものについて概述すると、二ノ丸は、山下ノ丸の諸郭の中心部に位置し、高石垣をめぐらし、偉容を呈している。三代藩主吉泰の時まで藩主の居館が設けられ藩政の拠点となっていた。この南西隅には石垣を一段高くし、三層の櫓が建てられていた。山上の天守櫓が焼失して後は、この三層櫓が鳥取城を象徴する建物となった。三ノ丸は三代藩主の時、二ノ丸から南東の一層低い三ノ丸が拡充整備され、城主の居館を始めとする主要な建物が建てられ、藩政の中心が二ノ丸からこの三ノ丸に移った。

天球丸は、二ノ丸の東北の一層高い場所にあたる。これは池田長吉のときその姉の天球院の居館を建てるために築いたものといわれているが、石垣修理に伴う発掘調査で長吉以前に構築された石垣が検出され、前身になる小規模な曲輪が存在したものと思われる。

その他、山下ノ丸には多くの曲輪があるが、二ノ丸、三ノ丸、天球丸以外は時代によって用途も異なり複雑に変化している。

このように山下ノ丸は、中世的な山城が近世的城郭へと変化整備された典型として特筆されるものである。なお、山上ノ丸、山下ノ丸の諸々の建物は、明治12年政府の命によってすべて解体撤去されてしまい、現在は、石垣や堀等を残すのみとなっている。

**山腹の砦群** 烏取城に関する主要な城郭遺構は、古絵図、文献等の歴史資料や、史跡公園として活用されるなかでよく知られているが、その他に久松山の山腹には一般にあまり認識されていない城郭関連遺構が数多く残っている。これらのほとんどは、山上ノ丸が鳥取城の中心であった近世初期の頃までに構築されたと思われるもので、それは山腹の斜面を削り出して平坦部を形成したものである。これらの遺構の配置状況を概観すると、それは山上ノ丸を防禦するために、山頂にいたる主要な尾根を中心に構築されている。東坂道周辺、中坂道周辺、西坂道周辺及び雁金山・丸山へ尾根伝いに結ぶルートにあたる久松山北面の尾根周辺に集中して見られる。このうち西坂道周辺部のものには、初期の鳥取城の主要部として活用されていたものがあり、古絵図にも記されている「松ノ丸」「太鼓ヶ平」「鐘ヶ平」などに符合する遺構が明確に残っている。

また東坂道中途のひょうたん池付近にも大規模でまとまりのある一群の遺構がある。ここには井戸跡、通路、土塁を伴う曲輪なども見られ、鳥取城の重要施設があったことをうかがわせるものであるが、これに関する文献資料はなく、遺構の示す性格については現在のところ不明である。

## 6 明治維新後の鳥取城跡と史跡指定

明治維新によって廃藩置県が実施されると、鳥取城は池田家から陸軍省の所管となり、明治12年には鳥取城に残るすべての建物は解体撤去され、石垣、堀等の遺構のみが残った。同22年鳥取城跡は再び池田家のものになり、以後、山下ノ丸跡の広場には公共の施設が相ついで建設されていった。その主なものをたどって見ると、三ノ丸跡には現在の県立鳥取西高等学校の前身になる尋常中学校（明治22）、宝隆院庭園の横には、当時の皇太子（後の大正天皇）の山陰行啓に際し、その宿泊所となった「仁風閣」（明治40）が建ち、更に仁風閣敷地より西側の家老屋敷等の跡地には、一部埋立てして「鳥取公設運動場」（大正13）が設けられるなど、公共の場として大いに活用された。しかし、反面広大な城跡の大部分の土地は、地形的な制約や池田家の私有地であることもあって、放置されて荒れるに任せた状態であった。さらに昭和18年に襲った鳥取大地震によって、城跡各所の石垣崩壊が生じ、無残な城跡を露呈することになった。翌19年、城跡の所有者である池田家は、その土地の全てを鳥取市へ寄付している。

戦後、鳥取城跡の保存の気運が市民の間で盛り上がってきた。こうした中で、昭和28年鳥取市の平和塔建立奉賛会は、山上ノ丸の三ノ丸跡に白亜の塔の建設を計画した。この塔の建立の目的は「塔に大藏經を埋蔵して、不運の戦死をなぐさめ、もって鳥取市の天災地変を防止する」ことであった。この計画について鳥取市教育委員会は、山上ノ丸に建設することについて次のとく異議を唱えた。「久松山城址は數少ない山城であり、強大な防禦性と戦略的位置の重要さは全国的にも希有のものであり、このような重要史跡内に永久的構築物を設置することは、史跡としての意義を失わせるものであり、さらに、建立後の景観を予想しても好ましくない」というものであった。結果、この平和塔は久松山の西側の雁金山に建立された。

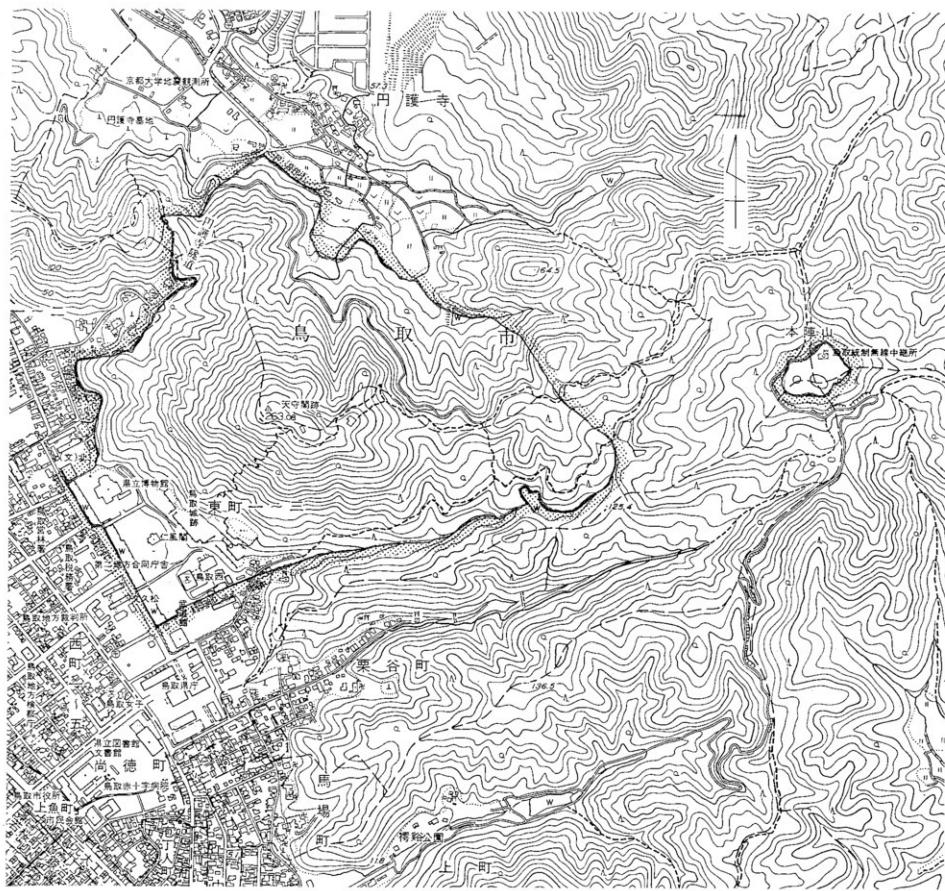
これを機に鳥取城跡の史跡指定による保存の気運が一層高まり、昭和29年4月、鳥取市教育委員会と鳥取市長は、史跡指定申請書を文化財保護委員会に提出し、さらに指定までの当分の間保護措置として鳥取県教育委員会から史跡の仮指定を受けた。

同30年、仮指定となった鳥取城跡について、文化財保護委員会の文部技官の現地調査が実施された。

同32年12月18日、鳥取城跡のある東町地内と太閤ヶ平のある滝山・百谷地内約668,663平方メートルが史跡として指定された。鳥取城跡が鎌倉時代から近世徳川時代に移行する転換期の歴史に深い関係を持つ



第2図 烏取城跡山上の丸・山下の丸位置図 (S:1/2500)



第3図 史跡鳥取城跡附太閤ヶ平史跡指定範囲図 (S:1/10000)

史跡であること、城跡の構成が前記の歴史的推移と対応し山城的型式を残す山上ノ丸と中腹の砦跡等の古い城跡遺構に対し、近世の城郭型式を残す下山ノ丸を中心とする新しい城跡遺構が新旧重層して併存すること等が学術的に高く評価されたためである。

その後、昭和62年8月10日円護寺側299,661平方メートルが追加指定され、久松山のほぼ全山968,324平方メートルが国の史跡に指定された。

## II 発掘調査の経過と体制

### 1 調査の経過

今回の発掘調査は、保存修理事業の事前調査として鳥取城の大手門にあたる中ノ御門を対象に実施した。中ノ御門は、現在石垣のみが存在する状態となっており、遺存する石垣についても部分的に崩れの著しい箇所が見られる。また、本来の石垣の様相は改変によって失われ、鳥取城の絵図で確認される東側石垣の姿は現在見ることはできなくなっている。今回の調査は、門の改変前の状況や、門を構成する石垣の遺存状況の把握、また、付帯施設等の存在確認を主な目的として行った。

現地調査は、平成10年10月下旬から開始し、同12月末に終了した。調査にあたっては、調査対象地が車道部分や、鳥取西高等学校のグラウンド内に及ぶことなどからかなりの制約を受けることとなったが、北側石垣北面に付設された石段や改変前の石垣基部の検出、門櫓に伴うものとみられる礎石などを確認することができた。

### 2 調査体制

発掘調査の体制は下記のとおりである。

調査主体 鳥取市教育委員会

教育長 田中哲夫（平成10年9月まで）

教育長 米澤秀介（平成10年10月から）

事務局 鳥取市教育委員会文化課

文化課長 平木一義

課長補佐 平川誠

主事 毛利元

嘱託 浜野るみ子

調査員 前田均（鳥取市埋蔵文化財調査センター）

調査指導 文化庁記念物課、奈良国立文化財研究所、鳥取県教育委員会、鳥取県立博物館、

田中哲雄、伊東太作、山根幸恵、坂本敬司、久保穂二朗、長岡充展、中原齊、山本洋介

調査協力 鳥取県立鳥取西高等学校、鳥取市建設部公園街路課、（財）鳥取市公園・スポーツ施設協会、上月工業有限会社、

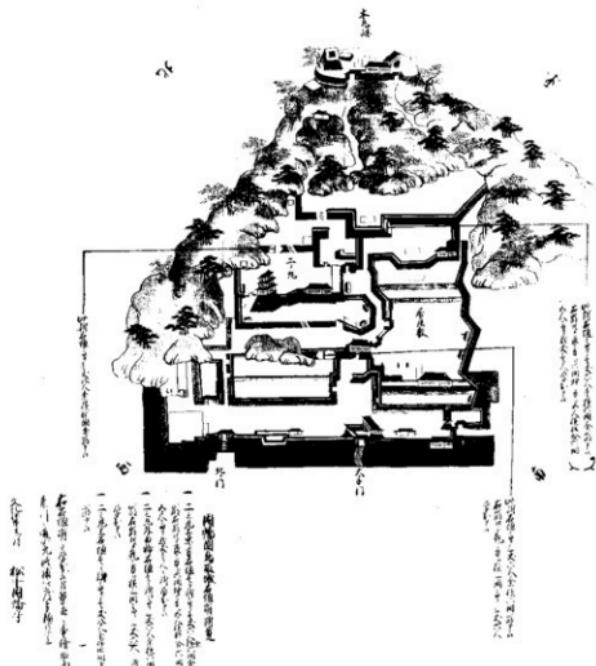
大谷邦夫、下田弘人、斎藤博、福長正弘、山下久雄、加藤勝茂、坂本茂（敬称略）

### III 発掘調査

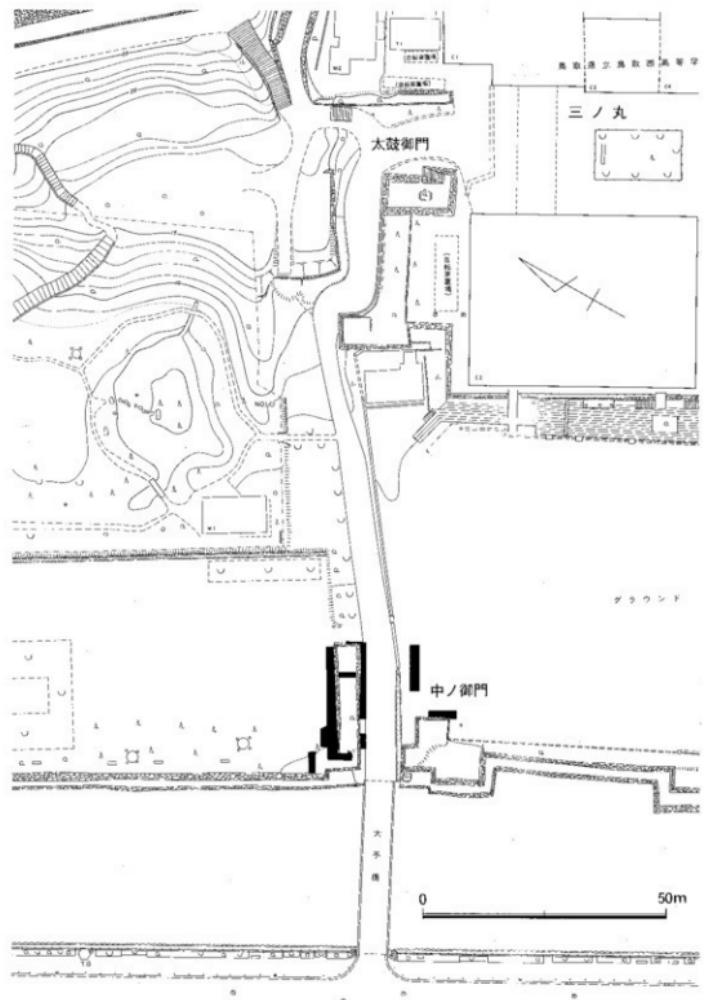
#### 1 中ノ御門

中ノ御門は山下ノ丸の南西側中央に位置する鳥取城の大手門である。中ノ御門の北側と南側にはそれぞれ北ノ御門、南御門が構えられている。中ノ御門を入ると、緩やかな坂道を登り太鼓御門に至る。太鼓御門の東側には三ノ丸が位置し、三ノ丸北側の一級と高い位置に二ノ丸が構築されている。二ノ丸をはじめ山下ノ丸は、池田長吉による鳥取城の大改造によって整備が行われている。中ノ御門の整備も長吉による一連の大改造によってなされたものとみられる。

現在の中ノ御門は櫓などの建物はすでになく、堀にかかる大手橋を渡った左右に石垣が遺存しているのみである。右側石垣はおおむね築造時の状態が保たれているが、左側石垣の東側には石垣の積替えが行われた状況が認められ、改変された様子を窺うことができる。また、鳥取城絵図からも原状とかなり変わっていることがわかる。文化4年の絵図とされている「因幡国鳥取城絵図」(第4図)等には、大手橋を渡った正面に左側石垣に付く石垣がみられ、右側石垣との間に渡槽が構築されている姿が描かれている。絵図にみられる正面石垣は現在見ることはできず、中ノ御門の様相が後世の改変によって大きく変わってきていることが確認される。

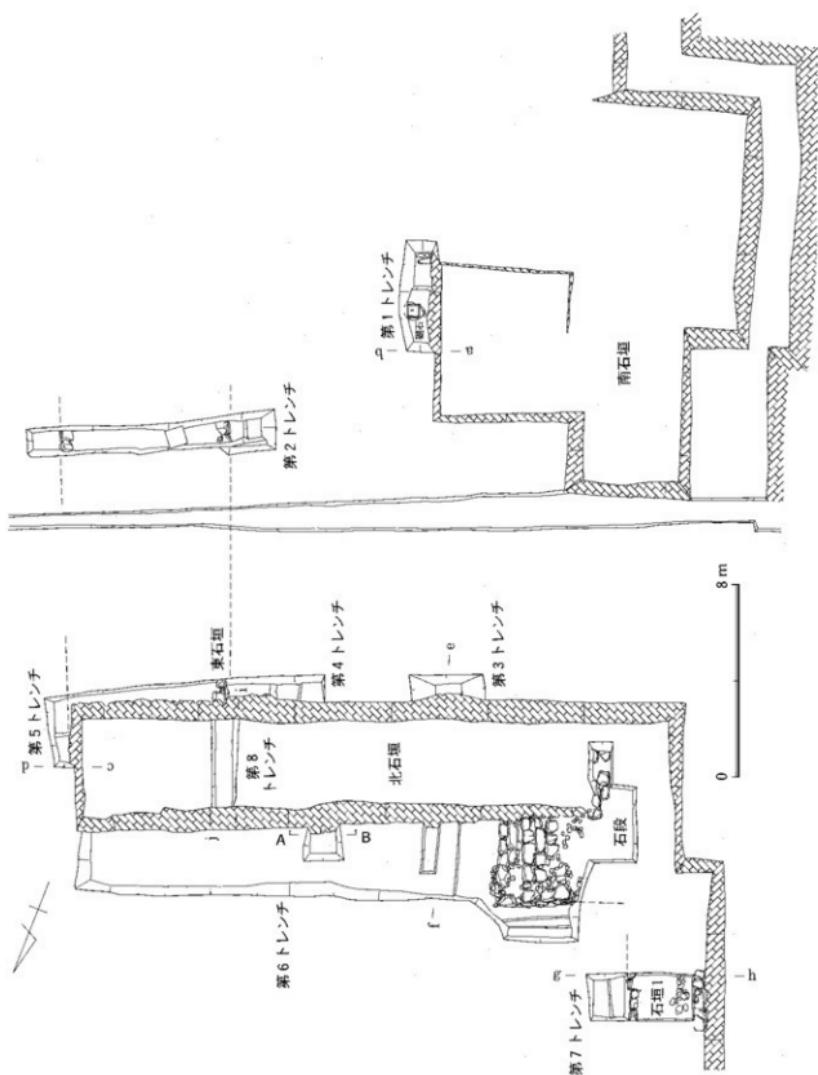


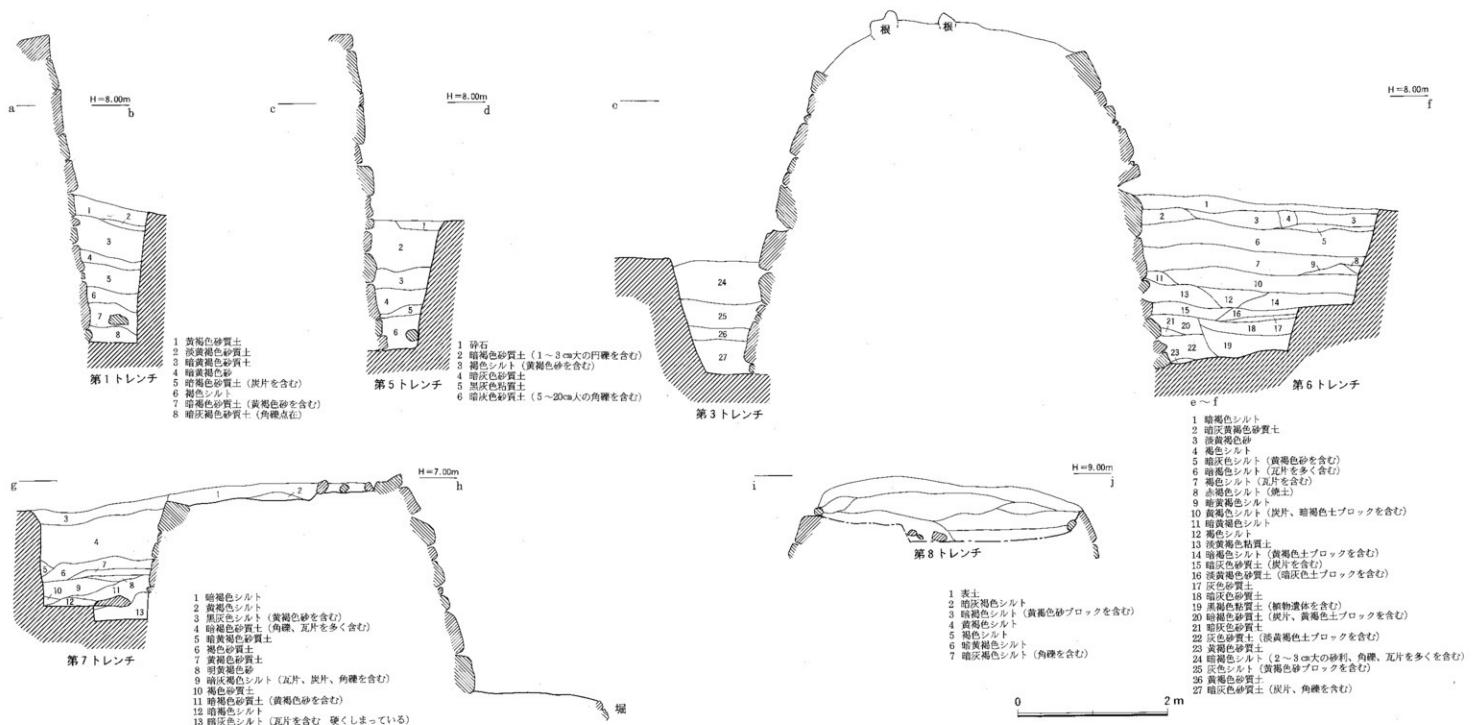
第4図 因幡国鳥取城絵図（文化4年鳥取県立博物館蔵）



第5図 調査位置図

第6図 遺構配置図





第7図 調査地断面図

## 2 調査の結果

南石垣の東面下に第1トレンチ、北石垣の南面、東面、北面下にそれぞれ第3、4、5、6トレンチ、北石垣の天場に第8トレンチ、北石垣の西側に第7トレンチを設定した。また、消失した東石垣の確認のため南石垣の北東側に第2トレンチを設定し調査を行った。調査の結果、第1トレンチから門檻に伴うものとみられる礎石、第6トレンチの西端から絵図にみられた石段が検出され、第2、4トレンチでは消失した東側石垣の基部が遺存していることが確認された。

### (1) 調査地の層序 (第7、10図)

中ノ御門の周辺は多量の客土が行なわれている。第7図のa～b(第1トレンチ)断面の1層～6層、第10図(第2トレンチ)の1層～6層および9層～16層、第7図e～f(第3、6トレンチ)断面の1層～17層、24層、25層が後世の客土と考えられ、厚さ1.0～1.4mにわたって観察される。客土以下は標高4.9～5.4mでおおむね暗灰色系あるいは黒褐色系の角礎を含む砂質土の堆積がみられる。第1トレンチで検出した礎石(標高5.3m)や、第6トレンチで検出した石段最下段(標高4.9m)の高さなどから推定して、標高5m前後にみられるこれらの堆積層が近世の地表面と思われる。

### (2) 石垣 (第6図)

中ノ御門の石垣は、大手橋を渡ったすぐ左側(北石垣)、右側(南石垣)と、左石垣に付く正面石垣(東石垣)によって構成されている。鳥取城の絵図によれば、東石垣と南石垣に渡槽が構築されているが、渡槽はすでになく、正面に築かれた東石垣も失われている。北石垣と南石垣は遺存しているものの、中ノ御門本來の姿を見ることはできなくなっている。

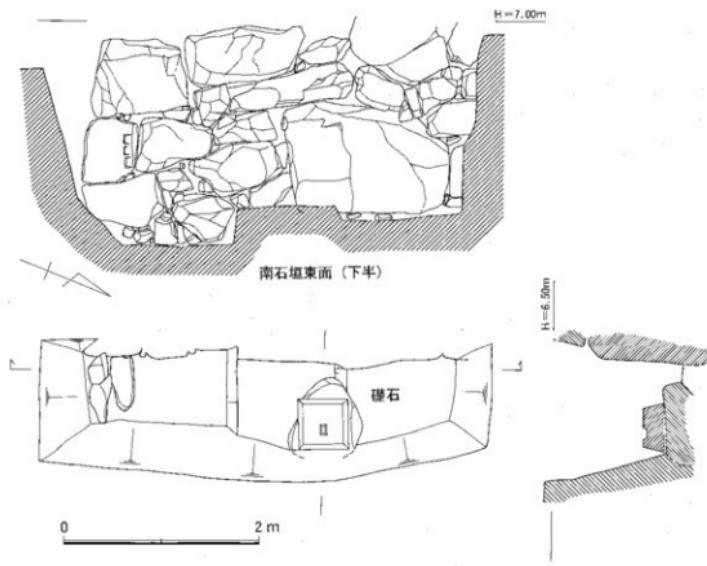
#### 南石垣 (第8図)

遺存状態は比較的良好でおおむね原状を保っているものと思われる。東側へ凸状に張出し、上面に渡槽が構築される。石垣凸部の幅は天場で6.2mを測り、石垣の高さは根石から4.5mである。石材は長さ1m以内の自然石が主体であるが、石垣下方に長さ1.6m、幅1.2mあまりの大型の石が一石用いられている。角石は基本的に加工された石が使用されている。

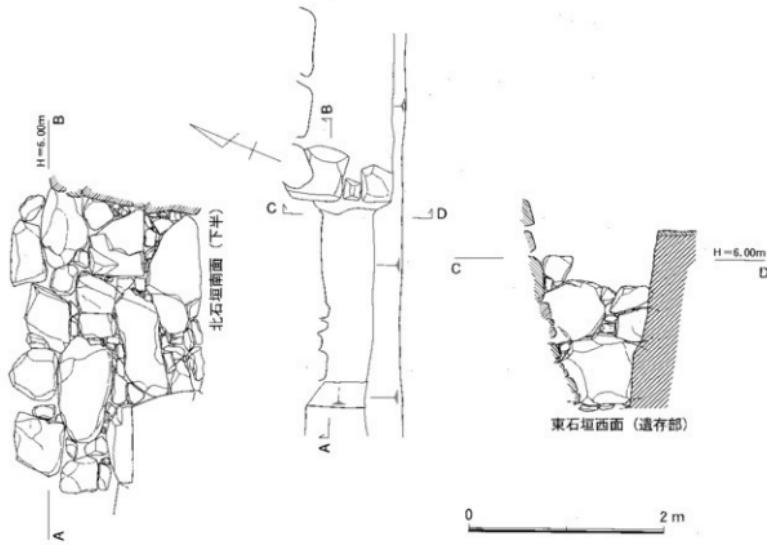
#### 北石垣 (第9、11図)

石垣の北面、東面の下半および南面の西側約3/4は比較的良好な遺存状態を示し、おおむね築造時の状態を留めているものとみられるが、南面の東角から西側へ幅6m前後と、東面の上半部は遺存部に比べ石積の様子が異なり新しく積替えられた石垣と考えられる。また、北面の石垣についてみると、根石から2.6m上位の標高7.1mあたりで、東角から西角に石積の目地が直線的にとおる状況が見られ、天場石の様相を呈している。この天場石を境に上方と下方では石垣の勾配が異なり、明らかに積足し、改変された様子が窺われる。南面には北面で観察される同様の天場石は認められず、北面側には段状の石積みが行なわれていた可能性も考えられる。石垣の規模は、天場で長さ22.4m、幅3.4～4.0mである。根石からの石垣の高さは北面4.2m、南面4.0m、東面で4.2m、前後を測る。石材は長さ1m以内の自然石が主体である。東石垣 (第9、10図)

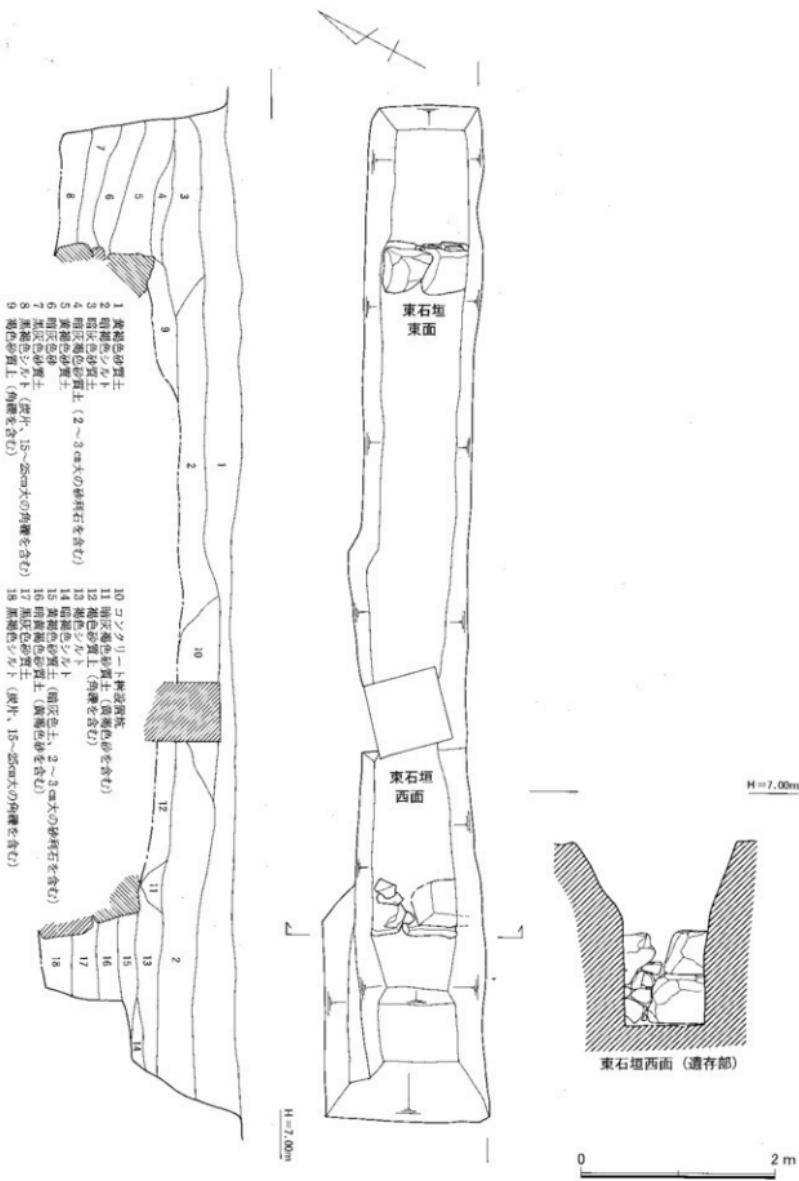
消失した石垣であるが、第2、4、5トレンチによってその所在を確認した。石垣の大半を欠くものの、高さ1.1m前後にわたってその基部が遺存している。残存部からみた石垣の幅は6.6～7.0mを測ることができる。今回の調査では東側角石の検出ができなかったため、石垣の長さを明らかにすことができなかつたが、「鳥取御城内手配之図」(第16図)に記載されている法量からは長さ11間あまりの石垣であったことが推測される。



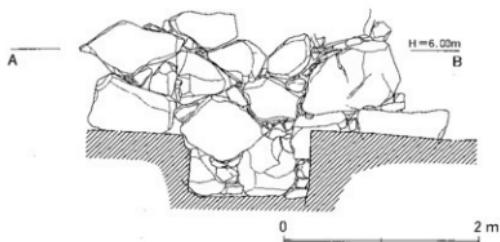
第8図 第1トレンチ実測図



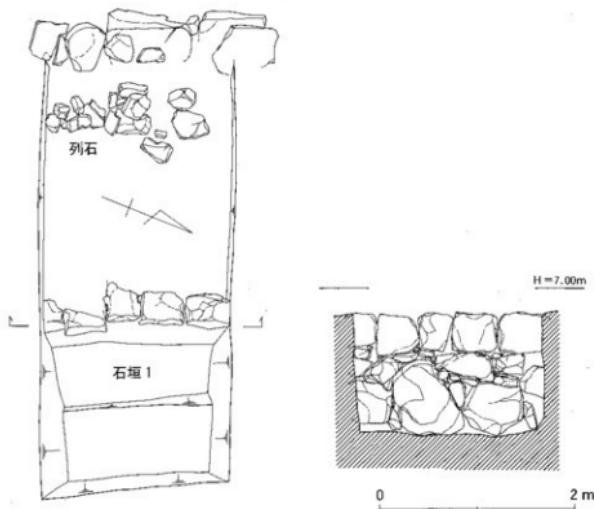
第9図 第4トレンチ実測図



第10図 第2トレンチ実測図



第11図 北石垣北面根石実測図



第12図 第7トレンチ実測図

#### 石垣 1（第12図）

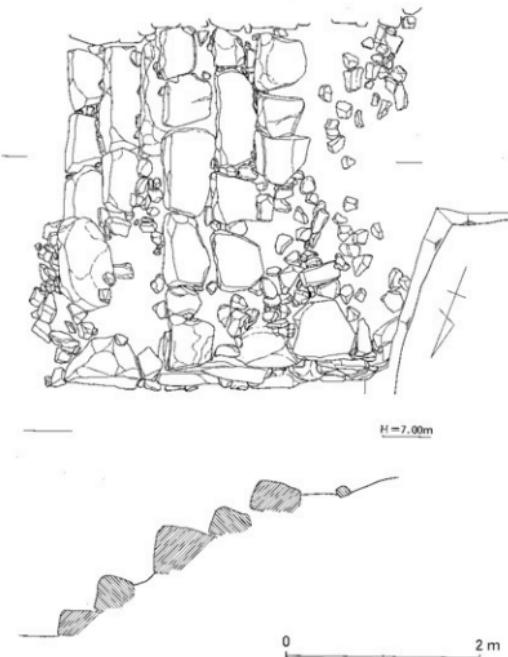
北石垣北面の西側に設定した第7トレンチで検出した。堀に面する石垣の背面3.0mに位置し、並列させて築かれている。石垣の高さは1.25mを測る。石材には50~70cm大の自然石を用いて積み上げ、上端はほぼ水平に整えられている。中ノ御門北石垣の西端で検出した石段の檻面に対して直行する関係がみられ、この石垣に石段が付設されている可能性が考えられる。また、石垣の堀側2.0mには石垣と並列する列石が遺存しており、礎などの建物に伴う礎石の可能性が考えられる。

### (3) 石段 (第13図)

北石垣北面の西端に付設されている。遺存状態は良好とはいはず、上位の1～2段はすでに失われているものとみられ、本来は6～7段の石段であったと考えられる。石段全体の幅は3.5mを測り、高さは2.0m前後と推測される。各段は、長さ40～105cm、幅50cm前後の石を5～6石配列して築いている。段の幅は30～40cm、高さは30cm内外である。最下段の設置面の高さは標高4.9mあまりを測り、この高さがおおむね近世の地表面と考えられる。この石段については、鳥取城の絵図である「鳥取御城内手配之図」内に描かれており、その規模について「雁木玄間半」の記述がみられる。

### (4) 礁石 (第8図)

中ノ御門南石垣の東面直下に設定した第1トレンチで検出した。礁石は、南側角石から2.4m、石垣壁面から48cm離れた位置に配置され、70～90cm大の比較的扁平な自然石上に水平に置かれている。礁石の大きさは上面40×40cm、底面で50×50cmを測り、台柱状に非常に丁寧な加工が施されている。また、上面には中央から若干外れた位置に長さ11cm、幅7cm、深さ4cmの長方形の孔が掘り込まれている。門檻に伴う礁石と思われる。



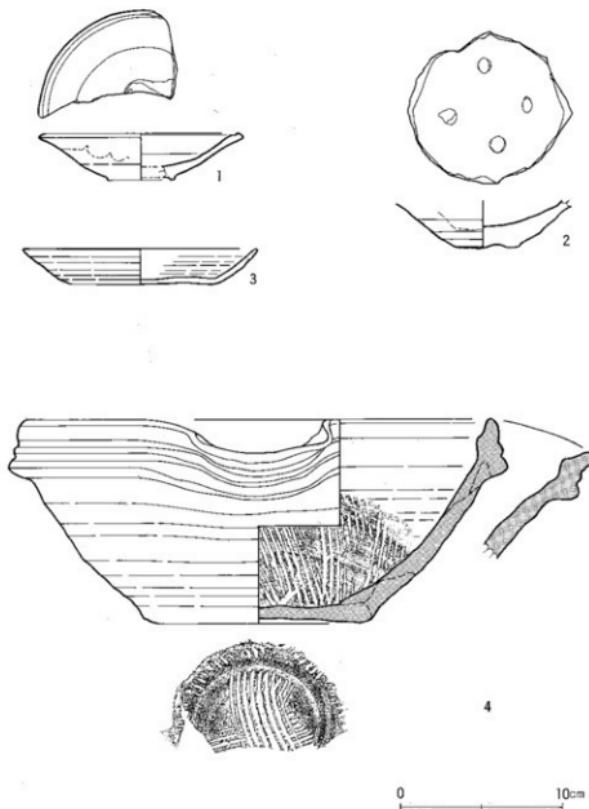
第13図 石段実測図

(5) 出土遺物 (第14、15図)

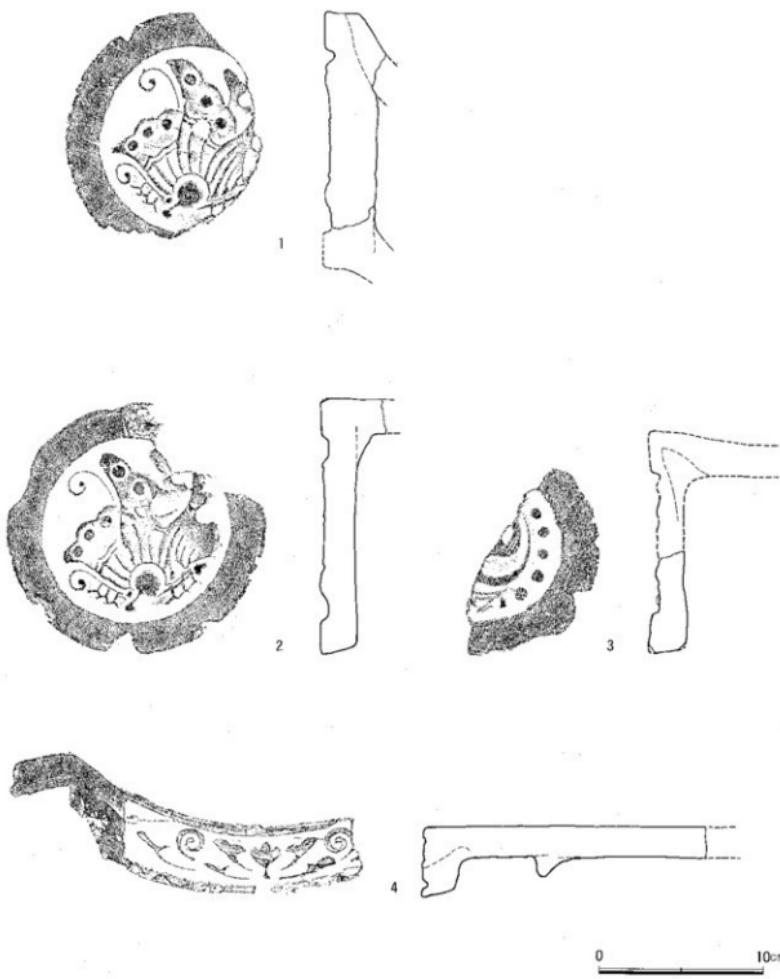
遺物は客土中から陶磁器片、瓦片が出土した。陶磁器は近・現代のものが大半をしめている。第14図(1、4)、第15図(2、3)は第7図e～f断面の第10層から検出した遺物である。また、第14図(3)は第5トレンチの第11層から、第15図(4)は石段の埋土内から出土した。

陶磁器・土師器 (第14図)

(1、2) は唐津焼の皿である。(1) は口縁部1/4、底部の1/5が残存する。口縁部はわずかに外反し、口縁端部に一条の圈線がめぐる。口縁部に重ね焼きのためにできた剥離痕が残存する。口径11.8cm、底径4.1cm、器高2.9cmを測る。見込みと高台部に砂目跡が残る。口縁部下位から内外面に釉を施し、全体に緑灰色を呈する。胎土は黄褐色を呈し、0.5mm以下の細砂をわずかに含む。(2) は口縁部を欠く底部のみの残存である。底径3.8cmを測り、内外面共に4ヶ所の砂目跡が残る。高台部上位から内外面に釉を施し、全体に灰オリーブ色を呈する。胎土は緻密で0.5cm以下の細砂をわずかに含み、灰褐色を呈する。



第14図 出土遺物実測図 (1)



第15図 出土遺物実測図（2）

(3)は土師皿である。口縁部1/3、底部は2/3残存し、口径14.2cm、底径2.2cm、器高2.1cmを測る。内面はヨコナデのち軽いナデ、外面はヨコナデ、底部は糸切りのちナデ調整を行う。口唇部に煤の付着が見られる。にぶい橙色を呈する。

(4)は備前の攝鉢である。口縁部1/7、胴部～底部にかけて約1/2残存する。口径28.6cm、底径13.8cmを、器高12.6cmを測る。口縁部の縁帶は内側がやや突出しており、外面は2条の沈線をもつ。内面は8条単位の条線を重複させて施す。底部見込みの攝目上に重ね焼きの痕跡を有する。胎土は1～2mmの砂粒を含み、暗赤褐色を呈する。

## 瓦（第15図）

軒丸瓦、軒平瓦や、道具瓦の鳥衾が出土している。いずれも破片である。

(1) は鳥衾とみられ、瓦當面約4/5が残存している。外縁は直立素文縁をなし、瓦當面には左側を向く揚羽蝶文が施されている。外径約15.6cm、内区径約11.0cmを測る。

軒丸瓦には揚羽蝶文の(2)と、巴文をもつ(3)がある。(2)は左を向く揚羽蝶文が施され、全体に力強い表現がなされている。外径約15.6cm、内区径約11.3cmを測る。

(3)は左巻の三ッ巴文をもち、珠文を配する。外径14.0cm、内区径8.8cmを測る。

軒平瓦(4)は、瓦當面約3/4が残存する。中心飾りには花文をもち、葉脈がかなり簡素化されている。脇区には刻印が刻まれているようであるが判然としない。

## IV まとめ

鳥取城は、鳥取市街地の北東に位置する標高263mの久松山山頂を本丸とし、山麓部に築かれた二ノ丸、三ノ丸などの曲輪で構成される中世山城の様相を呈する城である。現在は石垣と堀が遺存しているにすぎないが、石垣からは当時の偉容を窺ふことができる。石垣は、明治以降荒廃し旧状を失いつつあったが、それにもまして、昭和18年に発生した鳥取大震災の影響は著しく、崩落が各所に及んだ。石垣の復元修理は、史跡指定後から随時実施されており旧状を取り戻しつつある。

今回の発掘調査は、鳥取城の大手門にあたる中ノ御門について実施した。中ノ御門は山下ノ丸の南西側中央に位置し、堀を渡ったすぐに築かれている。中ノ御門を通り緩やかな坂路を登っていった正面には太鼓御門が位置し、その東側に三ノ丸が構えられている。

中ノ御門の現状は、門に伴う建物はすでに石垣が遺存するだけとなっている。遺存している石垣についても後世の改変によって本来の姿を失っており、渡槽が構えられた正面の石垣は現在見ることができなくなっている。今回の調査はこれらの石垣の残存状況、原状の確認を目的として実施したものである。調査は鳥取市教育委員会で実施し、調査面積は約135m<sup>2</sup>である。調査の結果、消失した石垣の基部や、埋没していた石段、礎石等を検出することができた。

中ノ御門の原状は現存する遺構からは判然としないが、その姿は因幡國鳥取城絵図（文化4年）等に見ることができる。それによると大手橋を渡ったすぐに築かれた鍵の手形の石垣と、右側に築かれた石垣に渡槽が構築されている。さらに、より具体的な姿については「鳥取御城内手配之図」（第15図）にみることができる。この絵図は年代不詳ではあるが、元禄5年以前の図と考えられており、久松山山頂の天守や、二ノ丸、三ノ丸をはじめとする山下ノ丸など鳥取城を構成する櫓や石垣等が描かれ、絵図内にその規模などが記述されている。絵図内の中ノ御門にも規模についての記述が見られ、渡槽については、「中御門渡御橋桁行五間」、「武間梁御門四間左右」が読み取れる。また、石垣についても「石垣高一丈二尺」などの記述がみられる。その他、中ノ御門に伴う施設として、正面石垣（東石垣）の背面と左側石垣（北石垣）の北面西側に階段とみられる図が描かれており、それぞれに「雁木四間」、「雁木七間半」等の記述がなされている。

今回の調査結果からみると、正面石垣の幅は根石部分で6.6~7.0mを測ることができる。「鳥取御城内手配之図」には同石垣の幅について「三間」と記されているが、これを天井の幅と見ると規模的にはおおむね合致するものと考えられる。また、正面石垣の背面に描かれている階段は今回の調査で確認することができなかつたが、左側石垣の北面で検出した石段については絵図にみられる「雁木七間半」と記述されている階段に該当するものと考えられる。この他、右側石垣の東面下で台柱状の石を検出した。この石には非常に丁寧な加工が加えられており門櫓に伴う礎石と思われる。

中ノ御門の具体的な築造時期については不明確であるが、17世紀前葉に池田長吉によって行われた鳥取城の大改造によってその骨格は築かれたものと考えられる。その後、改築、改造が行われたことも十分考

えられるが、その詳細については判然としない。

遺物は瓦、陶磁器類が出土している。いずれも客土中から検出され、近現代の遺物が主であるが、陶磁器類にはわずかに唐津焼の皿が含まれている。また、瓦は揚羽蝶文、巴文の軒丸瓦や、花文の中心飾りをもつ軒平瓦、道具瓦の鳥衾が出土している。



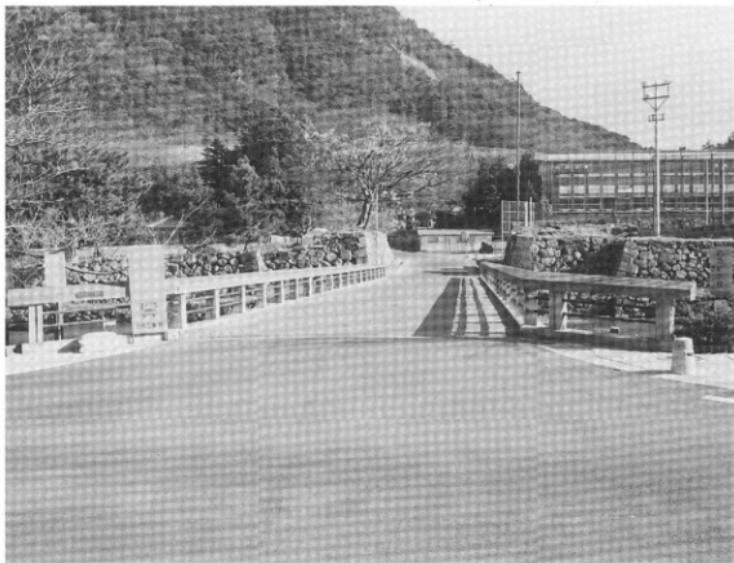
第16図 鳥取御城内手配之図（鳥取県立博物館蔵）

## 参考文献

- 鳥取県立博物館「久松山鳥取城—その歴史と遺構—」『鳥取県の自然と歴史－6－』 1984年  
鳥取市「新修鳥取市史」 1983年  
鳥取市教育委員会「史跡鳥取城跡附太閤ケ平 保存修理概要報告書」1987年  
鳥取市教育委員会「史跡鳥取城跡附太閤ケ平 天球丸保存整備事業報告書」1997年  
鳥取市教育委員会「史跡鳥取城跡附太閤ケ平 太鼓御門発掘調査報告書」1998年



中ノ御門（明治初年撮影 右 中ノ御門渡檣 手前 宝珠橋 奥 太鼓御門渡檣）

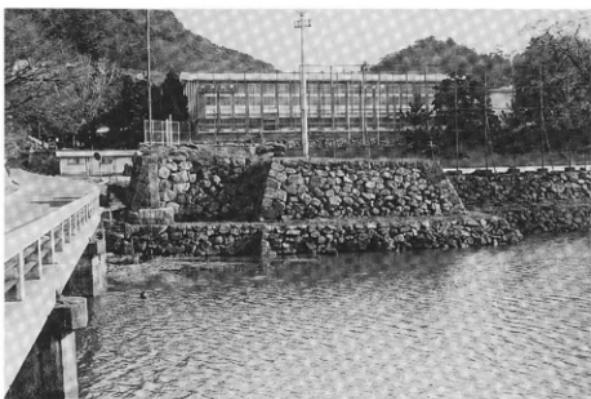


中ノ御門（南西から）

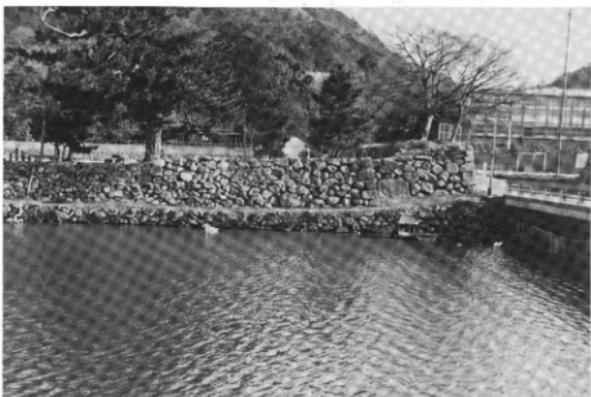
## 図版2



中ノ御門（北東から）



南石垣南面（南西から）



北石垣南面（南西から）

北石垣北面（北から）



北石垣北面（北西から）



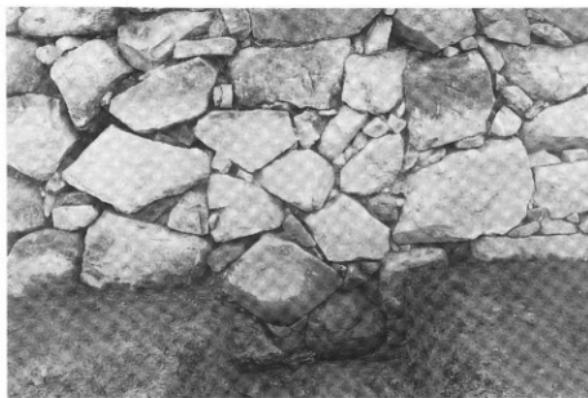
北石垣北面（北西から）



## 図版4



北石垣北面中央  
(北西から)



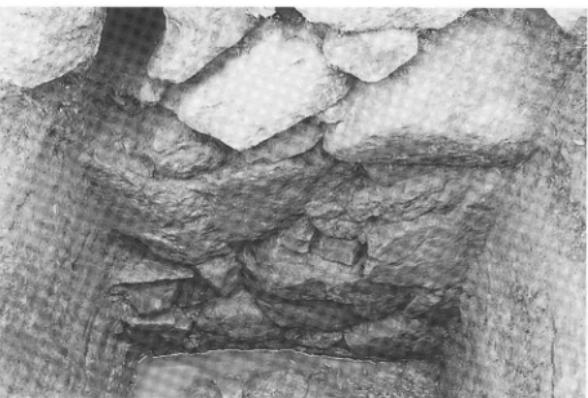
北石垣北面根石検出状況  
(北西から)



北石垣東面 (北東から)



北石垣東面角石  
(東から)

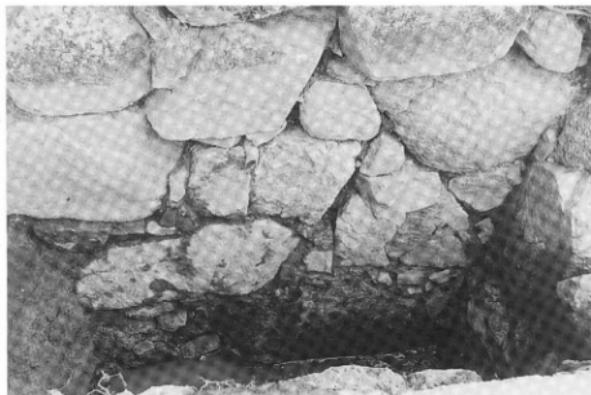


北石垣東面根石検出状況  
(北東から)



北石垣南面 (南東から)

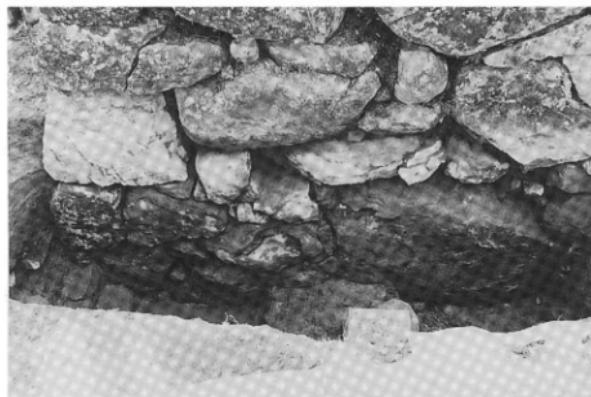
## 図版 6



北石垣南面根石検出状況  
(南東から)

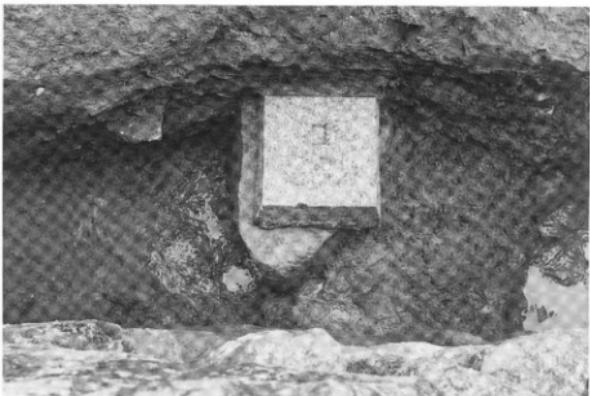


南石垣東面（北東から）



南石垣東面根石検出状況  
(北東から)

図版 7



図版 8



東石垣西面遺存状況  
(南西から)



東石垣西面栗石遺存状況  
(南東から)



石段検出状況 (北東から)



石段検出状況（北東から）



石段検出状況（北西から）

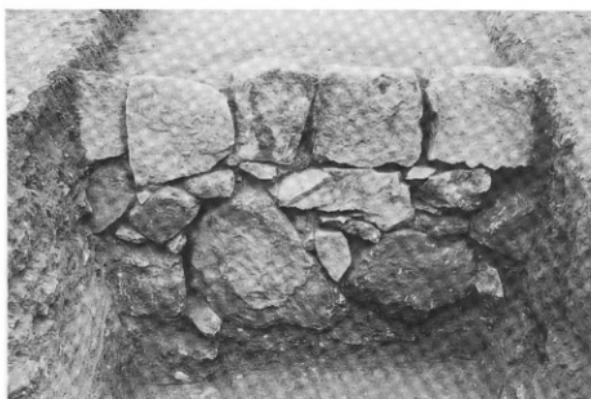


北石垣北面埋土状況  
(北東から)

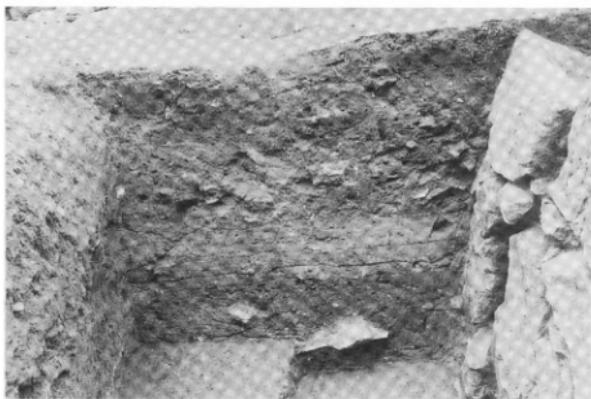
図版10



石垣 1 検出状況（北東から）



石垣 1 検出状況（北東から）



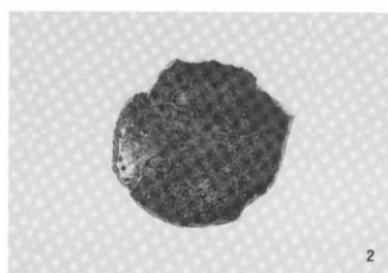
石垣 1 埋土状況（北西から）



2



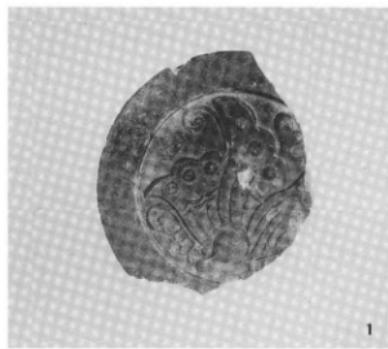
3



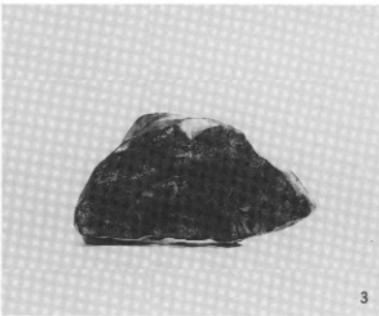
2



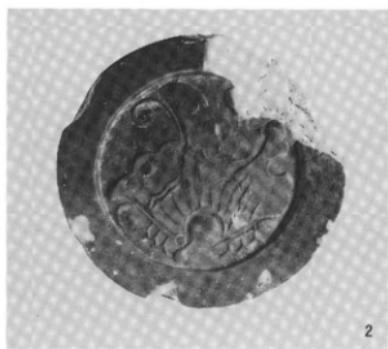
4



1



3



2



4

出土遺物

# 報 告 書 抄 錄

ふりがな	しきととりじょうせきつけたりたいにうがなる なかのごもんはくつちょうさほうこくしょ							
書名	史跡鳥取城跡附太閣ヶ平 中ノ御門発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	前田 均							
編集機関	鳥取市教育委員会							
所在地	〒680-0047 鳥取県鳥取市上魚町39				TEL 0857-22-8111			
発行年月日	西暦1999年3月24日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所取在地	コ一ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
鳥取城跡	鳥取市東町	市町村	遺跡番号	35°	134°	19981020	135m <sup>2</sup>	史跡 鳥取城跡附 太閣ヶ平 整備
		31		30'	14'	~19990228		
		201		11"	25"			
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
史跡鳥取城跡附 太閣ヶ平	城郭跡	江戸時代	石垣 石段 礎石	瓦 陶器				

210.2  
Shi  
図書館

史跡鳥取城跡附太閤ヶ平  
中ノ御門発掘調査報告書

---

平成11年(1999)3月

編集 烏取市教育委員会

発行 烏取市教育委員会  
〒680-0047 烏取市上魚町39

---

印刷 総合印刷出版株式会社 23-0031